跡見学園女子大学文学部紀要　第四十一号　（二〇〇八年三月十五日）

『枕草子』のことば

――形容詞・形容動詞を中心に――

土屋博映

要旨

長年の『枕草子』研究の総まとめ（①～⑪）と今後の方向性について論じた。

①『枕草子』の「をかし」と「あはれなり」（『佐伯博士喜寿記念論集』昭和51年）
②『枕草子』の美的理念語（『中田教授功績記念論集』昭和53年）
③『枕草子』の「をかし」の価値（『短大紀要第22集』昭和61年）
④『枕草子』の「すさまじ」の位置（『短大紀要第29集』平成5年）
⑤『枕草子』の「にくし」の価値（『小松博士退官記念論集』平成5年）
⑥『枕草子』の「こころもとなし」について（『短大文科報21』平成7年）
⑦『枕草子』の「ねたし」の位置（『短大紀要第33集』平成9年）
⑧『枕草子』の「普通でない」を意味する言葉について（『短大紀要第36集』平成12年）
⑨『枕草子』の「はづかし」とその周辺（『短大紀要第37集』平成13年）
⑩『枕草子』の「ゆかし」とその位置（『短大紀要第38集』平成14年）
⑪『枕草子』の「かたはらいたし」の位置（『短大紀要第39集』平成15年）

これらの研究の過程で、『枕草子』の根底に存在する言葉は「をかし」であり、この「をかし」を軸として、他の美を表す語や醜を表す語が用いられていると考えるに至った。①～③では、美を表す語について、美的理念語→美的評価語→③美的要素、と三段階に分類できると考え、④～⑥では、醜を表す言葉に目を向け、⑧～⑪は美・醜を表す語の、周辺の語について論じた。その結果、「をかし」の対義語として、「にくし」が存在しているとの結論を導くに至った。今後は、「をかし」と「にくし」を美と醜の対極に位置づけ、それらを取り巻く他の語が、どのように支えあい、『枕草子』の語彙の世界を形成しているのか、明確に位置づけたいと考えている。

一、はじめに

大学三年の時、『枕草子』を卒業論文のテーマとして取り上げようと考えた。卒業論文は「『枕草子』研究――『をかし』と『あはれなり』を中心として――」という題目で書き上げた。爾来、あちらこちらに、『徒然草』とか『おくのほそ道』とか、寄り道をしながらも『枕草子』の「ことば」の研究は細々と続けてきた。発表のよりどころも、記念論集であったり、紀要であったり、散在しているので、この機会に今までの足跡をたどり、これからの方向性にむけての「けじめ」をつけようと考えた。今までの研究の総まとめ的な論になるかもしれないが、全体を通しての自分なりの結論を導いておきたいと考える。

二、研究の足跡

①『枕草子』の「をかし」と「あはれなり」――情景と動植物の描写から――（『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』・昭和51年12月）

②『枕草子』の美的理念語――「あはれなり」「をかし」「めでたし」を中心として――（『中田祝夫教授功績記念国語学論集』・昭和53年10月）

③『枕草子』の「をかし」の価値（『跡見学園短期大学紀要』第22集・昭和61年3月）

④『枕草子』の「すさまじ」の位置（『跡見学園短期大学紀要』第29集・平成5年1月）

⑤『枕草子』の「にくし」の価値（『小松英雄博士退官記念日本語学論集』・平成5年7月）

⑥『枕草子』の「こころもとなし」について（『跡見学園短期大学文科文化報21』・平成7年3月）

⑦『枕草子』の「ねたし」の位置（『跡見学園短期大学部紀要』・第33集・平成9年3月）

⑧『枕草子』の「普通でない」を意味する言葉について（『跡見学園短期大学部紀要』・第36集・平成12年3月）

⑨『枕草子』の「はづかし」とその周辺（『跡見学園短期大学部紀要』・第37集・平成13年3月）

⑩『枕草子』の「ゆかし」とその位置（『跡見学園短期大学部紀要』・第38集・平成14年3月）

⑪『枕草子』の「かたはらいたし」の位置（『跡見学園短期大学部紀要』・第39集・平成15年3月）

三、各研究の結論

①について

「をかし」の方は明暗で言う「明」である。はなやかさ、若々しさ、はれやかさ、きらびやかさ、つやめいたさま、あざやかさ、などがそれにあたるものであった、そういったことから、あるものの盛りであるさま、夜の明けるさま、さらには、はなやかさから続く、目新しさ、またそれにつながる、めずらしさにまで及ぶのであった。

また、ある対象には、そのものなりの似つかわしさがあり、それにあ

たった場合も「をかし」を用いるのである。これは「をかし」が、あるものの本来あるべき姿に対し多く使われていたことからも言えるのである。

「あはれなり」は明暗よりは強弱の「弱」をとった方がよいと思われる。荒れているさま、不完全なさま、さびしそうなさま、頼りなさ、葉の落ちるさま、入日、などもすべて「弱々しい」ものである。（中略）「あはれなり」は、あるものの本来の姿に何か他の要素を加える、それもそれによって、弱さ、寂しさ、といった気持がこめられるものを加える場合に使われるのだ、と考える方がよりよいようである。

以上のことから、枕草子では、情景と動植物については、「をかし」は表面的（単純的・視覚的）鑑賞であると言えると思う。これに対し、「あはれなり」は深層的（複雑的・心的）鑑賞であると言ってよい。

②について

枕草子の作者の美を評価する意識は如何なるものであったろうか。それは、まず、「をかし」と感じ得るか否かからはじまったものと考えられる。「をかし」とはある一点に快感を持てばよいのであって、それほどの強い意味はないわけである。ところが、そうして美を評価していったとしても、「をかし」だけでは充分に表現しきれない部分も当然表れてくるわけである。対象に「をかし」を感じ、それで事が足りれば「をかし」と評価するが、高貴なもの、それを強調したい場合、「めでたし」が用いられ、小さいもの、幼いものには「うつくし」が、「をかし」で言い表せなかったものを補充するといった過程をたどるのである。「なまめかし」「たふとし」「おもしろし」もこれらに続くもので、これらは先に述べたごとく、美的理念語のうち、美的評価語と名づけてよいものである。「きよげなり」「をかしげなり」「うるはし」「あざやかなり」「やむごとなし」などは美的要素語と考えられたわけである。

ところで、「あはれなり」は「をかし」を主軸とする枕草子の性格により、美的理念語としては孤立したものとなっているようである。快感を根底におく「をかし」と哀感を根底におく「あはれなり」は二大美的理念語とも呼ぶべきものであろうが、枕草子においては「あはれなり」の位置は、「めでたし」などの一連の語と、「をかし」を支えるものという点で同一レベルのものであると言えよう。

枕草子は、「をかし」を主軸としている点は考慮に入れなければならないが、主要美的評価語――一般美的評価語――美的要素語という美的理念語の位置関係は、他の平安文学作品にも及ぼせるのではないかと考える次第である。

③について

平安時代の文芸理念は「もののあはれ」とまとめられてよいようです。しかしその中で、『枕草子』のみが「をかし」の文学と呼ばれるのは、それだけ個性的であるということです。それは一つに、彼女のもって生れた性格によるものでありますし、また彼女の境遇が彼女にそのような作品を描かせたのだということでもあります。

本来日記文学として存在したであろう『枕草子』が、随筆文学――我が国最初の――と成り得たのも、そういったことが原因となっているのであります。

「をかし」の文学と呼ばれるなら、『枕草子』の基本は「をかし」であり、「をかし」が如何なる他の美的理念語よりも優位に立たねばならないはずですが、「春はあけぼの」の冒頭の段が、いみじくもその事実を暗示してくれたようであります。

また、「をかしきもの」が存在しないことは、存在しないことによってかえって、その「をかし」の優位性を示しているということです。作品全体の基調であるからこそ、「をかしきもの」は記されなかったということになるのです。

「あはれ――をかし」の語順は、また「をかし」が優位であることの証明でした。これこそ、作者の心の奥にひそむものが「をかし」であることを如実に示していることに他なりませんでした。

④について

「すさまじ」の関連語についてまとめると、次のようになる。

わびし・あいなし・にくし・わりなし・いとほし・より所なし・はらだたし・愛敬おくる

これを「にくし」の関連語と比べてみよう。

わろし・見苦し・愛敬なし・なめし・そしる・あやし・まどふ・愛敬おくる・心苦し・あぢきなし・腹立たし・聞きにくし・心あし・すさまじ・わりなし・むつかし・ゆゆし・かたはらいたし・まがまがし・さかしがる・うたて・いみじ・心もとなし・なのめ・汚し・つらし

網掛けの語は重なりあうものである。「にくし」との関連は、これから判断すると、相当あるように思われる。ただし、関連語の多さと言えば、「にくし」が圧倒的である。これは「すさまじ」の方が「にくし」よりも対象を制限する、言わば個性の強い、批評語としての性格があることによるのであろう。

「すさまじ」の本質は、「かならず来べき」「今年はかならず」「かならずさるべき」などとあったごとく、当然そうなるはずという前提・基準があることであり、「にくし」にはそれがなく感情語に近いものと言える。「すさまじきのみならず、いとにくくわりなし」とあったことがその証拠である。

ただし「すさまじ」が、会話文を中心として「にくし」と同様な不快感を示すこともあったわけである。

筆者はこれまで、清少納言は、まず対象を「をかし」（快）かそうでないか（不快）でとらえ、次に他の美的理念語や嫌悪表言語に分類するという構造をもっていたと考えて来たが、本稿の検討により、対象をまず「をかし」と「にくし」でとらえ、そこから「めでたし」などの美の方向、「すさまじ」などの不快の方向に位置づけていったものと推定するに至った。

「をかし――にくし」などの下位分類に、「めでたし――すさまじ」な

どの批評語が位置すると考えるのである。

⑤について

「をかし」と感じ得るか否かという、作者の精神構造を本稿の検討をふまえて分析すれば、次のようなものであったろうと推測されるのである。

第一段階　「をかし」と同じ方向（快）か、違う方向（不快）か

第二段階　快の方向でどの位置か、不快の方向でどの位置か

（中略）『枕草子』では、「をかし」はあくまでも対象の評価の基準とし、それに対し、快と不快の二方向に評価を示す言葉（概念）が連なっているという作者の精神構造なのである。

とすれば、「めでたし」「あはれなり」「うつくし」などという快の方向の美的理念語と、「すさまじ」「にくし」「心もとなし」などの不快を示す嫌悪表現語は、「をかし」を基準とし、それを補助し、支えるという点では、同一レベルであるということができよう。（中略）

「にくし」は感情的な面が強く、単に不快を意味する気持が強いものの評価語として「をかし」と対照的な位置での評価の一端となっていたということは言えよう。少なくとも、「をかし」と判断する基準の一つに、「にくし」や「にくからず」があったことはまちがいない。醜を表現する語として、美を表現する「うつくし」や「めでたし」などと同等の価値をもっていると言えるのである。

⑥について

「こころもとなし」は、不安感のみに偏らない。本質は、期待がなかなかなえられず、じれったく思う気持であり、そのじれったさは、多くの不快感につながるものではあるが、時に待ち遠しくかんじられるものでもある。不安感と期待感、言わば善悪両用であるのが、「こころもとなし」であり、簡単に不安を代表とする言葉と決めつけるのは、好ましいことではない。善悪両用という多義性が、作者にとって多用した一因となっているのであろう。

「おぼつかなし」は、「こころもとなし」よりも不安感が強い言葉であった。それはどうしてかと言うと、はっきりしないことが前提となっているからである。はっきりしないということは、よくわからないということであり、それはやはり不安感に直結してしまうものである。

以上二語に対し、「うしろめたし」は、不安感がもっとも強い言葉である。それは、本質が、頼りにならない、言わば、不信感だからであろう。また、そのように意味が限られているということは、使用数が少なくなるということにつながっていると思われる。

以上のことから結論すると、不安感の程度から位置づけると、

うしろめたし（強）――おぼつかなし（中）――こころもとなし（弱）

となり、多義性、言わば作者からみた重要度から位置づけると、

こころもとなし（重要）――おぼつかなし（普通）――うしろめたし（非重要）

ということになる。

⑦について

「ねたし」の基本構造は、

① こうあってほしいという願望

② 破られる

③ 「ねたし」と感じる

ということである。ただし、①の「こうあってほしいという願望」は、「うまくやりとげたと思った」、「まさかそんなことはしないだろう」、といった場合も含む。つまり、願望や期待、さらに予想が破られる状態が「ねたし」なのである。

この「ねたし」は、基本的に、相手の行動について「ねたし」と感じる場合（これをAとする）と、自分の行動について「ねたし」と感じる場合（これをBとする）の二つに大別される。

（中略）

「ねたし」の対象となるものは、ほとんどが人間の行動であって、それについて、思いのままにならないことが「ねたし」でとらえられる、というのが基本的構造である。

それが、相手の行動の場合は「にくし」に近く、不快な気持で「ねたし」（しゃくだ）と言い、自分の行動であれば、後悔（しまった）の気持をこめて「ねたし」（しゃくだ）と言うのである。

ところが「ねたし」はその、不快や後悔にとどまらず、快の方向に進み（しゃくなほどよい）、さらには美的理念語（しゃくなほど趣深い）の領域にまで至るのである

これは、「ねたし」自体が、「にくし」のように「をかし」に対立する位置をしめたり、「すさまじ」が「にくし」の下に位置するのとはちょっと異なる位置にあるということを暗示している。

つまり、「にくし」に近いところに位置しながらも、「をかし」に近いところにもある。

⑧について

「例」が、もっとも一般的な「普通」であり、そして、「例ならず」として、もっとも一般的な「普通でない」を意味するのである。

「なのめ」は、作者にとって、あまり使い慣れた言葉ではないようだ。「いいかげん」な気持ちが根底にあり、「普通でない」としては用いられていない。ただし、もしも「なのめならず」として使われたならば、方向としては「例ならず」よりも善の方向で用いられたであろう。それだけ「例」よりも「なのめ」は悪の意味合いが強い。

「なべて」は「世間一般」といった意味で使われることが強い。そして「なのめ」同様、「なべてならず」としては使われない。しかも「なべてならず」として用いられれば、「世間一般と異なる」というニュアンスであったであろう。

「ただ」は形容動詞なのだが、「例」に非常に近く使用されている。ただ本質的には「何もない」という意味であるように思われる。だから「ただならず」というと「例ならず」よりも「普通でない」度合いが強い。

「おろか」は以上のどの語よりも個性的かつ強い言葉である。「言ふも

おろかなり」という慣用表現として使われることが多いことも特徴である。「いいかげん」な意味を本質とすると思われる点は「なのめ」と似ている。「おろかならず」の場合、「普通でない」意味に関連する表現としては、もっとも善で、かつ賞賛に近い。

したがって、「普通でない」を意味する表現を位置づけると、次のようになる。

例ならず　ごく一般的な「普通でない」の表現。善・悪・程度、あらゆる対象に用いられる。

（なべてならず）　「例ならず」よりもやや強い。善・悪・程度と用いられるであろう。

（なのめならず）　「例ならず」「なべてならず」よりも強く、「ただならず」に近い。善として用いられる傾向であろう。

ただならず　意味的には「例ならず」に近く、強く「普通でない」を意味する。やや悪の傾向である。

おろかならず　もっとも強い。善の傾向が強い。

「例ならず」がごく一般的な「普通でない」の意味である。作者は、気楽に、何げなく用いている。言葉を吟味しなければ、「普通でない」はこの「例ならず」を使えばよいのである。

「なべてならず」と「なのめならず」は、存在しないので、存在したものとして、考えて見た。「なべてならず」は、「例ならず」を、やや強めた文脈で使われ、「なのめならず」は、さらに強く、「ただならず」に近い。ただし、「なのめならず」は善、「ただならず」は悪の傾向が強いと思われる。

「おろかならず」はもっとも強い。そして賞賛の言葉として用いられる。

⑨について

拙稿には、次のような記載がある。

「『めでたし』は、『ありがたし』『け高し』『尊し』『心にくし』などの高貴さを示すものに接続する。『をかし』よりは、程度を甚だしくしたものに関連するのである。」

「『めでたし』は身分の低い人、また童を対象としないことを考慮すれば、人事を対象とした場合、特定の身分の高い人について用いられた、ということが出来よう。」

「（『めでたし』は『をかし』を基調とすることが多く、その場合、『をかし』よりも、より高い賞美の方向にあると言えよう。）

（中略）

〈評価語・美的要素の位置付け〉

①　主要美的評価　をかし・めでたし・あはれなり

②　一般美的評価　うつくし・なまめかし・おもしろし・たふとし・うらやまし

③　美的要素　きよげなり・やむごとなし・うるはし・をかしげなり・めづらし・あざやかなり

その他　よし・はづかし・かしこし・ゆかし・よろし・あたらし（以上抜粋）

これから、「たふとし」は仏教に関わるものの独自の評価、「やむごとなし」は限定として使われることが多く、「めでたし」の評価へとつながる場合が多いということが言える。

『枕草子』の中で、「立派」という評価において、最大の強さを持っているのは、どうやら「めでたし」ということが言えそうだ。

「はづかし」は「恥ずかしい」という心情が強く、対象を「立派」と評価するには弱い言葉だったと思われる。

「かしこし」は「すぐれている」として用いられることが多く、「恐れ多い」「立派」が時に使われるという状態である。

したがって、拙稿で述べたとおり、「はづかし」は「かしこし」とともに、美的理念語、美的評価語、美的要素語のいずれにも属さないことが確認された。また同時に「かしこし」は「立派」の気持ちがやや根底にあるが、「はづかし」はほとんどないということも確認できたのである。

⑩について

「ゆかし」は、対象に興味を持つ、という気持ちが非常に強いようである。そこから、具体的に「知りたい」「見たい」「聞きたい」「読みたい」などという意味があてられることが多くなるのであろう。美を表す方向にはあるのだが、抽象的な、言わば、ハイレベルな美を表す場合は少ない。

もしも美に関わる言葉を三段階に分けるとしたら、

①快の方向→②快→③美的評価語

このようになるであろう、これをふまえて、三語を位置づけてみよう。

「ゆかし」については、②がわずかに見られるだけで、③と判定できる例は皆無であった。これは、もしかすると「ゆかし」を成立させた「行く」という動詞の動作性が強いことによるのかもしれない。

結局「ゆかし」が美的評価語となるのは、「ゆかし」そのものよりも、「奥」と「ゆかし」の複合語の「おくゆかし」の方であったと言えるだろう。

「なつかし」は、用例は少ないのだが、すべて「魅力的だ」などと言う、③の美的評価語であった。この点、「ゆかし」よりも、抽象性が高く、形容詞的な状態性が高い。これは、もしかすると「なつかし」を成立させた「なつく」という動詞の状態性が強いことによるのかもしれない。

「つきづきし」は、大部分が③の美的評価語であると考えてよいかと思われる。これは、「なつかし」に非常に近い。ただし、「なつかし」のように「魅力的だ」というように、強く美を表現するのではなく、「につかわしい」とか「感じがよい」とか、どちらかというと、②の快を示す傾向にあるようにも見える。とくに気になるのは、「つきづきしくめやすし」とか、「つきづきしうをかし」などと、後に「めやすし」や「をかし」を従える例が見られることである。そういった点で、「なつかし」よりも美的評価語としての強さは劣っていると言えるようだ。これは、「つきづきし」の語源となった「付く」という動詞の性格によるのかもしれない。

したがって、『枕草子』においては、「ゆかし」「なつかし」「つきづきし」の関係は、美的評価語としては、

なつかし→つきづきし→ゆかし

という位置関係になりそうだ。

『枕草子』では、「心ひかれる」意味の「なつかし」「ゆかし」「つきづきし」三語の関係は、「なつかし」が美的評価語としてもっとも強く、「つきづきし」は、美的評価語としてはそれよりもやや弱く、それら二語に対し、「ゆかし」は、「快」の方向を示す役割をしていたと言ってよいと思われる。

⑪について

このようにして、考えてみると、「かたはらいたし」の特徴は「他人から見られて」というところにある。これは、「はしたなし」には存在しない。また、「かたはらいたし」は、他人の評価が「苦々しい」だが、「はしたなし」は「みっともない」である。この二語は「きまりが悪い」という点で共通項をもち、非常に似通った意味をもつが、「あさまし」はやはり語源を始めとして、かなり異なっていると言えよう。近い意味は「情けない」という感情、「見苦しい」という評価である。

次に、実際の用例から言うと、「かたはらいたし」は、人の発言に深く関わっているようである。

「発言――側で耳にする――きまりが悪い」という図式が本来であろう。これに対し、「はしたなし」は、人の行動また状態に深く関わっているようである。

「行動・状態――目にする――みっともない」という図式が本来であろう。

用例を見ると、みっともない格好や、きまりわるい時分、などは、「かたはらいたし」では用いにくい表現となっていることがわかる。

（中略）

発言を対象とする「かたはらいたし」。

行動・状態を対象とする「はしたなし」

物事を対象とする「あさまし」（後略）

四、各研究の要点

①（枕草子の「をかし」と「あはれなり」）について

「をかし」と「あはれなり」の位置→「をかし」は表面的鑑賞、「あはれなり」は深層的鑑賞。

②（枕草子の美的理念語――「あはれなり」「をかし」「めでたし」を中心として――）について

「あはれなり」「をかし」「めでたし」の位置→①主要美的評価語として、②一般美的評価語③美的要素と区別される。ただし、「をかし」が最上位である。

③（『枕草子』の「をかし」の価値）について

「をかし」の価値→「あはれなり」よりも優位。

④（『枕草子』の「すさまじ」の位置）について

「すさまじ」の位置→「をかし――にくし」などの下位分類に「めでたし――すさまじ」などの批評語が位置する。

⑤（『枕草子』の「にくし」の価値）について

「にくし」の位置→評価語として「をかし」と対照的な位置での評価の一端となっていた。「をかし」と判断する基準の一つであった。醜を表現する語として、「うつくし」や「めでたし」などと同等の価値。

⑥（『枕草子』の「こころもとなし」について）について

「こころもとなし」の位置→不安感の程度からは、「うしろめたし（強）――おぼつかなし（中）――こころもとなし（弱）」、多義性からは、「こころもとなし（重要）――おぼつかなし（普通）――うしろめたし（非重要）」となる。

⑦（『枕草子』の「ねたし」の位置）について

「ねたし」の位置→「にくし」に近いところにありながらも、「をかし」に近いところにもある。

⑧（『枕草子』の「普通でない」を意味する言葉について）について

「普通でない」の位置→「例ならず」（一般的）――（なべてならず）（やや強い）――（なのめならず）（さらに強い）――ただならず（強い）――おろかならず（最強）

⑨（『枕草子』の「はづかし」とその周辺）について

「はづかし」の位置→「恥ずかしい」という心情が強く、対象を「立派」と評価するには弱い言葉だった。「立派」では「めでたし」が最強。

⑩（『枕草子』の「ゆかし」とその位置）について

「なつかし」の位置→「なつかし」（美的評価語として最強）――「つきづきし」（やや弱い）――「ゆかし」（快の方向）

⑪（『枕草子』の「かたはらいたし」の位置）について

「かたはらいたし」の位置→発言を対象とする「かたはらいたし」――行動・状態を対象とする「はしたなし」――物事を対象とする「あさましし」。「はしたなし」（もっとも評価語的）――「かたはらいたし」（中間）――「あさまし」（もっとも感情語的）

五、評価と反省

拙稿の『枕草子』の研究の流れを見ると、「をかし」「あはれなり」を中心に美的語詞について研究した前半と、次第に醜悪語詞に目をむけるようになった後半とに分かれる。

この研究の流れを評価するとすれば、一つには、美醜を表す代表的な言葉は、ほとんど調べ上げたということであり、二つには、「をかし」を中心とした、『枕草子』の語彙体系をある程度位置づけたということであろう。

もしも反省するとすれば、一つには、他の研究者との比較が少ないということである。研究というものは、他者との切磋琢磨によってなされるものだとすれば、その点、論文自体に甘いところがあるのは否めない。したがって、『枕草子』研究史（とくに語彙の）に、目をむける必要があると考えられる。

二つには、それぞれの研究が十分に有機的に関連していないということである。「をかし」から始まって、『枕草子』のことばを研究したい、という意欲は大いにあったのだが、計画性をもって始めたのではないの

で、その都度、悪く言えば、思いつきで、言葉を調べていたきらいがある。したがって、それらの研究個々を、見直し、手直し、関連させるよう改めなくてはならないと思う。

三つには、三巻本にのみよっていることである。時間がないといえば言い訳だが、能因本・前田家本・堺本、にはまったくに近いほどふれていない。これについては、最低限、該当例が他系統本でもそうなのかどうか、確認する必要があると考えている。

六、方向性

平安時代の二大美的理念語といわれる、「をかし」と「あはれなり」、その地位は今後研究の進展があろうともゆるぎないものだろうと思われる。いみじくも、「をかし」の清少納言、「あはれ」の紫式部、と呼ばれた、それだけの価値があった言葉だと思われる。

『枕草子』『源氏物語』という、二大文学作品に与えられた、二大美的理念語という称号、それは平安時代、なかんずく、平安貴族の美感の象徴でもある。しかし、各作品は、その時代を代表するといっても、言葉の使用法、美感のあり方には、個人差がある。遺伝と環境が異なる人間が用いる言語なのだから、それは当然である。あたりまえなことだが、それは、意識して研究しなくてはならないと考える。

つまり、『枕草子』の研究は、あくまで清少納言という人物が書いた、いわゆる随筆文学の研究であるということである。目標はあくまで、『枕草子』の解明である。清少納言の美感であり、清少納言の言語意識であり、清少納言の人生観である。それは忘れてはならない。

具体的には、もう一度美的語詞の洗い直しをし、それを確定してから、醜悪語詞の洗い直しと確定、さらには追加調査したい言葉の選別、そして「をかし」を頂点とした、『枕草子』の語彙体系を確立させたい。

その清少納言の個性を浮かび上がらせる、一つの方向としては、やはり紫式部との比較が、あると思う。とくに『紫式部日記』との比較をしてみたいと、現在では強く考えている。

七、まとめ

学生時代に『枕草子』を研究したいと思い立ったのは、高校時代に『枕草子』がおもしろくて、読破したことがあったからである。古文は得意だったが、それにもっとも役立ったのが、『枕草子』であった。次が『徒然草』、最後に『おくのほそ道』であった。「三つ子の魂」というが、今でもその三作品が大好きであり、研究も平行して続けている。

しかし、なんといっても一番長く研究しているのは『枕草子』であり、そろそろ決着（けじめ）をつけなくてはならない時期だと思い立つにいたった。それだけ老いを感じたのと、何もせずに老いてゆく自分が情けなくも思ったからである。

方向性は出ている。

「をかし」→美的理念語→美的評価語→美的要素

これの位置づけである。『枕草子』の美感は、どういう言葉によってどうなされているかを見極めたいのである。また、

「にくし」→醜悪語

という位置づけである。「をかし」と「にくし」を、美と醜の対極に位置づけ、それらを取り巻く他の語が、どのように反目しあい、支えあっているのか、明確に位置づけたいと思う。近い将来、それが完成することを目指す、その誓いの言葉で、この論を締めくくろうと思う。